

大湫(おおくて)宿～細久手宿 8.5km を歩く

4月7日に引き続き大湫(おおくて)宿の東1kmほどから、細久手宿の西1.5kmほどまでの8.5kmほどを歩きました。山合の中山道は桜の花に加え、つつじの花が迎えてくれました。

武豊線が遅れ、金山駅で24分待ち

先回と同じく釜戸まで行くため、7:38の区間快速に乗りこんだ。同じようにぎゅうぎゅうずめの状態であった、でも今回は金山の手前の駅でもない所で列車は停止した。信号待ちのようで、しばらくして走りだしたものの、金山駅に到着した時には中津川行きの快速はすでに発車していた。中央線の電車本数が多いといっても、中津川まで行く電車は武豊線とおなじで30分に1本しか走っていない。

そのためホームで30分ほど待つことになった、その間に高蔵寺行きや多治見行きの普通電車や回送電車も2本走りぬけた。どこまで回送するのかな、おそらく神領駅ではと思うが、それなら客を乗せて運行させることはできないのかな?と思いたくなる。

次の中津川行き8:35に乗り9:24に釜戸駅に到着した。駅にタクシーはいないと思っていたので、駅舎を出る前に友がタクシー会社に電話をした。ところが駅前には2台のタクシーが客待ちしており、1台はちょうど客を乗せているところだった。先客がくるまえにとタクシーの運転手に大湫宿まで依頼した、ついでに、細久手宿の西1.0kmほどの地点まで歩きたいのだが、そこまで迎えに来てくれないかと話してみた。すると、年配の運転手さんは丁寧に瑞浪市の平岩の辻の辺りがよいだろうと説明してくれ、自分の携帯番号を記した名刺をくれた。運転手のおじさんは後藤さん、大湫宿までの途中も中山道にまつわるいろいろな話をきくことができ、これで今日のコースも安心して歩けそうでヤレヤレ。

スタートはきつい上り坂

9:45先回のスタート地点に到着、ここは十三峠の途中でありいきなり上り坂が始まる。歩き始める時に急な坂が続くのはこたえるもので、何事も変化は徐々にであってほしい

のだが....でもそんな坂道でもつつじの花がきれいに咲き、私たちを迎えてくれていた。まだ蕾もあればきれいに満開になった枝もあって、この時期に来なければ見られない山の美しさといえる。坂道を2分も行くと「八丁坂の観音碑」がある、そこに八丁坂の説明碑もあって、曲がりまがりして登り下り....「しゃれこ坂(八町坂)」と記されている。でも、しゃれこと八町の意味もつながりもよく分からない。



つつじの花



八丁坂の碑

まだ上り坂がつづき脇の土手にはつつじが所々に咲いて、あえぎながら上る気持ちを和らげてくれる。そんな坂道は急なため、土砂の流出防止として舗装がしてある。でも枯葉が積もり舗装道と言う感じはしない、そんな道を8分程行くと「山の神坂」の石碑がある。そして、じきの所に今度は「童子ケ根」の石碑があった。これは尾根の名前なんだろうが、先回のコースでは見なかったように思う。童子ケ根の尾根を下っていくと、かなたに大湫宿の家並が見えてきた。

大湫(おおくて)宿に到着

坂を下りきる手前に石仏がある、「寺坂の石仏群」で五つの石仏がたたずみ、手前には水仙の花が咲いていた。その目と鼻の先が急坂の終わる(逆コースだと始まる)地点で、そこには「十三峠」の碑が右側に、左側には「中山道大湫宿」の大きな石碑が立ち、しだれ桜が咲き誇っていた。

これで中山道の難所十三峠をすべて通り抜けたわけで、京へ43里半、江戸へ90里半とも記されている。そこは公園になっており集落外れの高台で、大きな銅像と説明の碑が

あった。ちょうど、そこへおばあちゃんが来たので、銅像は誰なのか聞いてみると「高砂工業の会長さんだよ」と言う。それで説明の碑を見てみると、確かに高砂工業の会長鈴木喜義は明治 45 年この地で生まれ...と記されていた。高砂工業は熱処理、タイル、今はセラミックスとか環境関係の製品も多く、本社は土岐市にある。田舎の大湫出身者の中で、一番の出世頭で故郷に錦を飾ったわけだ。



大湫宿が見えてきた



宿場の外れに立つ石碑

大湫宿の「くて」とは沼地や湿地帯のことを言う、大井・御嵩宿間が 8 里もあることから、両宿の中間に慶長 9 年(1604)に置かれた。宿場は標高 510m にあり、本陣 1、脇本陣 1、旅籠 30、約 3 町(340m)の細長く小さなものだったが、十三峠を控えて多くの旅人でにぎわった。和宮降嫁の時もこの宿に泊っている。集落へ入っていくと桝形があり、左へ曲がると角に昔風に造られた JA がある。すぐ先の右側に大湫コミュニティーセンターがあり、中に大湫宿に関する資料が展示されている。大湫宿の説明資料をもらって見ると、小さな宿場であることが分かる。この大湫宿は以前一度立ち寄って、本陣跡までは来たことがあるのだが、コミュニティーセンターの裏が旧大湫小学校で本陣跡だと分かった。でも、和宮が宿泊した部屋はすべて隣の土岐市に移築されて今は何も残っていない。部屋数が 23 もあった建物で 6 人の姫と和宮が宿泊したと記されている。本陣は何も残っていないことから、皇女和宮の陶製人形が置かれていた。

大雪で庇が破損した登録有形文化財の家

その先に問屋場跡の説明、白山神社の鳥居と階段があって、ムシコ窓の家もある。白山神社は宿場発足直後の慶長 17 年(1612)の再建棟札がある古い神社で、神明神社と

ともに一村二社という特例が認められた。この神社にもかつては神明神社のように大杉があった。

宿場の入口には三井屋の表札があったが、今度は門田屋の表札が掛けられていた。その隣に脇本陣跡の説明板があって、部屋数 19、別棟 6 という広大な建物でしたとある。しかし、今は壊されて半分ほどになっているという。街道からは少し高くなった右側に石段があり、その先に門が残っている。でも、立ち入り禁止の札がかかっていた。やむを得ず進むと左側に庇の壊れた大きな家がある、文化庁の登録有形文化財のプレートがあり、これがニュースで流れた大雪で庇が壊れたと言う家だ。ちょっと見た目には何の変哲もない普通の家で、周りに張られた板や格子の窓も全体に少しくたびれている。登録有形文化財の家というにはちょっと……と言う感じだが、費用の面で簡単に修復もできないらしく、文化財の維持管理の難しさがあるようだ。庇の瓦が落下する危険があるため、ロープを張って家に近寄らないようにしてあった。



庇が壊れた登録有形文化財の家

神明神社と大杉

登録有形文化財の家のすぐ前に神明神社がある、慶長 13 年(1608) 大湫宿の産土神として建立されました。先ほど白山神社があったばかりの距離だが、ここには御神木の杉がそびえている。高さ 60m、幹回り 11m で樹齢 1,300 年といわれている。岐阜県指定の天然記念物になっており、江戸時代から有名だったようで当時の旅日記にも「駅の中なる左のかたに大きな杉の木あり、木のもとに神明の宮たつ」と記載されており、かつて栄えた宿場町の面影を残す大湫のシンボルとなっている。高さ 8m ほどのところで 2 本に分かれているが、まっすぐ天に向かって伸びる雄姿は見る人を圧倒すること間

違うない。

大杉の根元には、白蛇の泉と黒蛇の泉の二つの泉がある。水不足に悩まされることの多かったこの地で、村人たちが雨乞いをするると白蛇が現れて大杉の根元に入っていました。早速そこを掘って見るとこんこんと湧く泉が見つかりました。さらに十数年後に再び水不足で雨乞いをするると、今度は黒蛇が現れ大杉の裏側の根元に入っていました。すると今度は以前の何倍もの水量の泉を掘り当てたといいます。

観音堂の桜は大湫宿のベストビューポイント

大杉の前に上へあがる小道があったが、通りを進むと右手の少し高い場所にすばらしい満開のしだれ桜がとてもあでやかだった。この時気がついたので、中山道は先ほどの小道だった。そこに「大湫宿に過ぎたもの」と言われた観音堂がある、道中安全、病気全快の観音様で、もとは神明神社の境内にありましたが、享保6年(1721)今の場所に移されました。二度にわたる宿場の大火で焼失し、現在のお堂は弘化4年(1847)に建てられたもの。60枚の絵天井が見事で、春になると桜が咲き誇る大湫宿のベストビューポイントと言われる。それを知らずに新道を歩いてしまったので、観音堂の下から手を合わせてお参りをした。



観音堂のしだれ桜



高札場

新道は1分も行くと旧道と合流するが、そのとき前から外国人の男女のグループがやってきた。タクシーの後藤運転手さんが言っていたように、最近では外国人も多いとか。「こんにちは」と挨拶をすると、「こんにちは」と挨拶がかえってきた。この時間(10時20分ごろ)に会うということは、かれらは細久手宿の大黒屋に泊って歩いてきたと思われる。

日本の昔の街道を巡る外国人もいる時代になった、おそらくわれわれが街道を歩くのと同じ気持ちなんだと思うが、彼らは日本の旧街道を歩いてどんなことを感じたのだろう。

街道の合流点から1分も行くと高札場がある、現在の高札場は寛政12年(1800)に描かれた絵図面をもとに平成10年に復元された。10枚の高札が上中下3段に掛けられており、それぞれの高札の最後には「奉行 竹腰山城守 成瀬隼人正(どちらも付家老)」の名前が記載されている。つまり、尾張藩の管轄であったことが分かる。

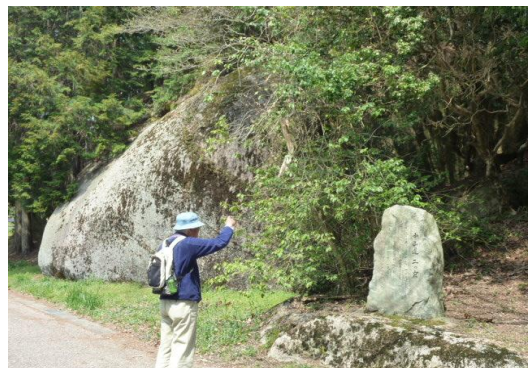
高札場のすぐ先で釜戸からくる道がT字路で交わる、ここを過ぎると大湫宿を離れて次は細久手宿に向かう。ここまで約1kmにも満たないほどの宿場は明治以降、交通の主流から外れたことで、現在も往時の姿のままひっそりと残る。宿は「おおくてマンダラ」と言って、お釈迦様の手の中のように安心して暮らせる場所と言われてきたという。

スズメバチ・馬頭観音・二つ岩・大湫病院

T字路を過ぎたあたりの道路は舗装されて、道幅も普通の県道くらいある広いもので、今までの田舎の雰囲気少し変わってしまうほど。でも、周りは田舎の風景ですぐにあらわれた二階建ての家には、大きなスズメバチの巣が二つもぶら下がっているではないか。駆除しなくても大丈夫なのか心配になってしまうが、地元の人たちは扱い方を心得ているのだろう。



小坂の馬頭様



左が二つ岩

高札場から5分も行くと「小坂の馬頭様」が道沿いの岩の上に立っている。その前方右手にベンチと東屋が見えてきた。そこに小川が流れていて「ホテルとトンボの遊涌パーク」と書かれた看板もある。山の清水が流れる場所なんだろうが、この辺りの田んぼな

らホタルやトンボがいてもおかしくないと思うのだが。その小公園沿いにはツバキが植えられていたが、背丈が2m ちょっとの若木なのにいずれも枝が折れているのだ。これも3月の大雪の仕業だろうが、それにしても雪の力は侮れないと思った。

すると今度は右手に大きな岩が現れる、「二つ岩」とか弁慶岩・夫婦岩などと呼ばれ、中山道の名物の一つで安藤広重の絵にもあり、大田南畝の「壬戌紀行」にも「誠に目を驚かす見ものなり」と書かれています。花崗岩が露出したもので手前が母衣岩、先にあるのが烏帽子岩。確かにでかい岩です、二つあるから二つ岩、それに真ん中に溝があって割れているようにも見えるので二つ岩かな。こんな山の中で目立つのは、大きな木か、大きな岩くらいだろう。

と思いながら少し行くと立派な建物が現れる、これが大湫病院だった。左手の少し低くなった場所に4階建てや2階建ての建物が数棟あり、かなり大きな規模である。こんな山奥にどうしてこんなに大きな病院があるのだろうか。地元には人はいないのだからどこからお客(患者)さんは来るのかな! と思わずにはられない。

琵琶峠の日本一長い石畳と八瀬沢一里塚

ここから細久手宿へ行くには、美濃の国の中山道の中で一番高い峠を越えて行きます。標高547mもある琵琶峠です、この峠の前後には昭和45年になって発掘された、日本一長いと言われる石畳があります。大湫病院を過ぎると直に右手の山道へ入って行き、標識や石碑があって石畳が始まります。岐阜県と瑞浪市の教育委員会の説明板があり、「瑞浪市の釜戸町・大湫町・日吉町にまたがる13kmの中山道は、尾根を通っていることから開発されず原型をとどめている。昭和45年には500m以上にわたる石畳も確認されている」と記されています。



琵琶峠東上り口」の碑と2体のお地藏さん



皇女和宮の歌碑」と馬頭様

この石畳の距離は、大湫宿でもらったパンフレットには「長さ 1km 余りの日本一」とあるなど、500m 以上が 1km と表現されるほど、長さを強調しています。

「琵琶峠東上り口」の碑と「村中」と刻まれた 2 体のお地蔵さんに見送られて、急な石畳の坂道を上って行きます。杉の木がうっそうと茂る坂道は、同じく石で組んだ側溝もあり当時のノミの跡も残っていると言う。なかなかきつい坂道を 10 分程上ると琵琶峠頂上に「皇女和宮の歌碑」と「馬頭様」が迎えてくれた。歌は「住みなれし 都路いでて けふいくひ いそぐとつらき 東路のたび」とある。

道はここから下りになり 2 分も行くと正面に、こんもりとした塚が見えてきた。一面が干し草みたいなものに覆われていて、これまで見た一里塚と少しイメージが違う。街道



八瀬沢一里塚

道の両脇に残る「八瀬沢一里塚」で江戸へ 91 里、京へ 43 里を示す道標で、琵琶峠の一里塚とも呼ばれています。この説明板では石畳のことが「日本一長い 730m」と記されていましたが、これで石畳の長さについて 3 ケ所の説明がありましたが、いずれも数字が違っていました。それぞれ強調するのはいいのですが、同じ瑞浪市の説明であり市の姿勢が疑われかねません。

ちょうど説明板の前に一人の男性がいて少しおしゃべりをしました、大湫宿で外人さんに会ったほかには、初めて街道を歩いている人に出会いました。そこから少し下った所にトイレがあり小休止。そこには展望台の標識があったが、先ほどの男性が降りてきたので見晴らしがよいのか聞くと、「東屋はあるが見晴らしは利かない」と言うので立ち寄らずに先に進んだ。10 分ほど下ると「中山道 琵琶峠西登り口」の大きな石碑があり、そのさきには鯉幟が泳ぐ民家があった。

集落を見守る地蔵堂

5 分も行くと鶏舎らしい建物が見えてきた、道路わきにはトラックが停めてあり「岐阜

の赤地どり 奥美濃古地鶏」と記されていた。さらに 5 分も行くと田んぼが広がる場所に出た、左にカーブする街道沿いに民家が数軒建ち並び、その背後には桜がきれいに咲いている。民家の前まで行くとコミュニティバスの「北野中町」停留所があり、右手の土手の少し高くなった所に祠があって、その周辺に桜がたくさん咲いていた。急な坂を上って見ると、お地蔵さんのようで秋葉さんのお札もあった。集落と田んぼを見下ろすところにあり、集落を見守っているのだろう。隣にはいくつかの石碑も並び、周りには水仙や黄色の花や桜が咲き、とても眺めの良い場所になっていた。見たときは良く分からなかったのだが、地図を見ていた友が「北野神社の地蔵堂のようだ」という。これまでに北野神社の案内はいくつかあったが、なかなか到着しないので少し疲れを感じていたところ。



琵琶峠西登り口の石碑



北野神社の地蔵堂

そこから 8 分も歩くとやっと北野神社に到着した、この神社は慶長年間に建てられたもので菅原道真を祀っている。しめ縄を飾った鳥居が立ち、隣の石碑には神社名の上に「銀幣社」と彫られている。この田舎であれば村社かと思ったのだが、そうではなく初めてみる格式の名前である。鳥居の横道沿いには「整田碑」と記された石碑と「皇太子殿下御成婚記念植樹」と記された柱が立ち、梅が植えられ花が咲いていた。整田碑というのは田んぼの区画整理事業の記念碑かな、時間も頃合いがよかったしすぐ先で女性二人が弁当を広げていたので私たちもお昼にした。

琵琶を持たない弁天様

昼の休憩をして歩き出すとすぐ先で道は分岐して「北野神社」のバス停がある、雰囲気

から中山道は右の狭い道ではと思ったが、少しくたびれた中山道の案内標識は左になっていた。半信半疑で歩いて行くと、畑にトラクターが止めてあって作業小屋があった。この雰囲気なら人がいると思い訪ねることにして声をかけると、「ハイ」と声がして私たちよりはかなり若い男性がでてきた。細久手へ行くのはこの道で良いのか尋ねると「そうですよ」と言うのでヤレヤレ、確認できたのでこれで一安心。

林の中の舗装された道が続き、つつじの花があちこちに見られたが、中山道の雰囲気がちよっと変わってしまう。バブル期に別荘地として開発されたものの半ば荒地になったのだろう。道端にはワラビがところどころにあって、家内はワラビ取りに一生懸命のようだった。そんな道を 15 分も行くと水道の配水設備があり、その先で下から上ってくる少し広い道と合流する。中山道の案内板があり天神坂の標識が立っていた。その坂を 2 分ほど下ると弁財天の池が見えてきた、享和 2 年(1802)太田南畝(なんぼ)が著した「壬戌(じんじゅう)紀行」に「左の方に小さき池あり。カキツバタ生いしげれり。池の中に弁財天の宮あり」との記述があります。常に水をたたえカキツバタやジュンサイの自生地になっていますが、ジュンサイが育つようなきれいな池には思えなかった。弁財天は通常 2 臂 (2 本の手) で琵琶を持った天女の姿ですが、ここでは 8 臂(8 本の腕がありそれぞれの手には武器を持っている)の立像が祀られているそうです。池の奥にある祠へいくため石橋が架けられている。しかし、わざわざ石橋を渡らずに池のこちら側からお参りして済ませた。でも、せっかくの変わった姿なのだから直接見てお参りすればよかったかなと後で思った。



弁財天の池と祠

弁財天の池から 10 分程行くと「瑞浪市天然記念物 南垣外ハナノキ自生地」という石碑があった、でも肝心のハナノキがどれなのか分からなかった。ハナノキの看板を枝につりさげてくれればよいのにと思った、そうでないとせっかく石碑を建てても誰も分か

らないだろう。その少し先に中山道の案内板があり、ここは日吉町の大越で細久手宿まで1.6kmとあった。

奥之田一里塚

案内板から5分も行くと上りの坂を登りきった所に「奥之田一里塚」が現れる、道の両側に塚が残り石碑と説明板があった。瑞浪市には東から西へ4つの一里塚があって、権現山一里塚、琵琶峠一里塚、奥之田一里塚と訪れた。残るはこの先に鴻巣一里塚がある。左側の塚は少し高い所にあつて石碑が立ち、周りを杭と鎖でかこつてある。右側には説明板と石碑が立ち、周りを杭と鎖でかこつて通路があつたので一回りしてみた。でもどちらの塚にも榎は植えられていなかった。

塚の前で記念写真を撮つて先に行くと、ここは日吉町奥之田で細久手宿まで0.8kmの看板があつた。さらに5分も行くと三国見晴らし台と馬頭様の標識があつて、少し高い所に馬頭観音様が安置されていた。でも、周りは見晴らしがよい場所ではなかつた。直に一軒の家が見えて、「中山道 細久手宿この先すぐ」の案内が立っていた。「この先すぐ」に勇気づけられ、ちょっと元気が出て歩いて行くと三差路に出る。左手に大きな工場がある、地図に載っている「クリスタルクレイ株式会社」で宿場の入口と分かる。



道の両側に残る奥之田一里塚

徳川家専用の本陣だった「大黒屋」

いきなり工場が現れるのもおかしな感じだが、おそらくここ細久手唯一の工場ではないかと思う。街道沿いに少し家があるのみで、集落の広がりはないのが見てとれる。こ

こ細久手宿は標高 420m にあり、慶長 11 年(1606)に国枝与左衛門が仮宿を設けるが放火により全焼する。しかし、大湫宿と御嵩宿の間は 4 里半(17.7km)もあり、慶長 15 年(1610)に新しく細久手宿が設けられた。本陣 1、脇本陣 1、旅籠 24、家数 65 軒の小さな宿場で、経営的には苦しく尾張藩の援助があったという。それに、尾張徳川家が他の大名との相部屋をきらい、本陣・脇本陣以外に大黒屋を尾張藩の本陣と定められていた。そのため、うだつ、玄関門、式台、上段の間を備えており、今もそのまま保存され、往時の面影を色濃く残す旧家です。その大黒屋は国の登録有形文化財に指定され、大井宿から太田宿の間では唯一の旅館として現在も営業している。

その大黒屋の手前に問屋場跡の標識があり、広場のある細久手公民館があった。そこには「細久手宿提灯祭り」を描いた立派な陶板製のモニュメントがあり、裏側にも陶板製の絵で「星あかり夢街道」と記されていた。



「細久手宿提灯祭り」が描かれている

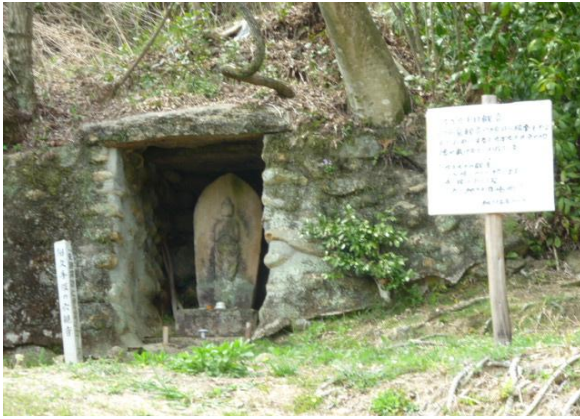


尾張藩本陣だった大黒屋

そのすぐ先に空き地があり、小さな溝のところには本陣跡の碑が立っていた。建物は現存していないが、代々「小栗八郎右衛門家」が務め、間口 22 間(約 40m)奥行き 15 間(約 27m)部屋数 23 室、畳数 212 畳、多くの別棟という広大な屋敷であったという。脇本陣も本陣の向かいにあったようだ、そこから少し行くと鯉幟が泳ぐ立派で大きな家がある。そこには「皇女和宮ご使用の井戸」の説明板が立っていた。和宮が徳川家へ降嫁のときここで休憩、そのとき使用した井戸。ここは小倉家で今も清水がわき出ている、以来、美容の水として親しまれていると言う。

九万九千日分のご利益がある細久手の穴観音

和宮ご使用の井戸から2・3分も行くと宿場を外れて田んぼや畑になる、そこに「大塚」の説明板があって面白いことが記されていた。ここは昔高貴な方が当宿で病死、ここに埋葬した。それ以降ここは「大塚」と呼ばれたという内容と、もう一つ皇女和宮が降嫁の時細久手宿に宿泊の予定であった。しかし、来宿の前に大火災になって復興半ばのため急きょ大湫宿に変更された。だが宮様の用便だけは変更できず、この地に埋葬した。それゆえ「おくそ塚」とも呼ばれるとか、どのような身分の方であれ生理現象はままならぬということか。



その説明板から3分程行くと自転車を引いた一人のお年寄りに会った、そのおじさんが「あそこにある岩屋はお参りして行くと良い」と教えてくれた。目と鼻の先の少し高くなった所に石積みみん何かが見えた。上っていくと「細久手の穴観音」の標識があり、土手に穴をあけて観音様が安置されていた。この石窟観音は縁日に1回お参りすると九万九千日分のご利益があると信じられ、

大勢の人が線香を持ってお参りしたため、すすで中が真っ黒になったほど。本尊は馬頭観音です。それで私も手を合わせてお参りをしました、縁日ではないと思うがせめて10分の1のご利益でも期待したいものです。

田んぼ脇の道を行くと、その先で土岐と御嵩へ行く道に分かれる。しばらく進むと道沿いに「中山道くじ場跡」の碑が立っていた、くじ場とは宿場の人足たちが休憩したり博打をしたりした所で、この辺りに3軒あったという。とすれば、この辺りが宿場の外れだったということか。

思わぬ発見「東浦とのかかわりも」

周りに杉林が続く道をしばらく行くと明治25年(1892)情報収集のためシベリア大陸を馬で単独横断した、福島安正陸軍武官(後に大将)が馬に水を飲ませた場所という説明板があった。手書きの説明板は最後の部分が薄れて文字は判読できなかったが、地元の団体がつけたものようだ。そして、この辺りならタクシーの後藤運転手が言っていた平岩の辻も間近なので、電話を入れて迎えを頼んだ。思った通りそこから5分程で平岩

の辻に到着した。



平岩の辻は県道 366 号と県道 65 号が交差する地点で、山間のちょっとした平地で、田んぼが広がり、川が流れている。橋の向こうの角には一軒のお店があり、たもとは交通安全や「西 つばしみたけ道」「南 まつのこ おに岩（鬼岩）」の道標と、「土岐頼兼の菩提所 曹洞宗開元院」の石碑もある。と言うことは、わが地元東浦の小川氏を破った美濃守護職土岐氏の菩提寺らしい。思わぬところで一つ勉強した、それにワラビも獲れたし今回のウォーキングは得るものも多くとてもよかった。次回はこの平岩の辻から御嵩までは 10km 程となり、そこを歩けば東海道との分岐点の草津宿から妻籠宿まで、京都府・滋賀県・岐阜県を歩き通したことになり、当面の目標を達成する。